

聖書:使徒の働き13章1～12節

説教:聖霊によって送り出される

はじめに

今日からまたしばらく使徒の働きを見ていきます。これまでのあらすじをざっと振り返っておきましょう。

主イエスが墓からよみがえられてから弟子たちの前に現れて下さったとき、このように語って下さいました。「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」(1章8節) その約束のとおり、ペンテコステの日に聖霊が降り、ペテロの説教を聞いて多くの人々が救われ、エルサレムに初めてのキリストの教会が建てられていきます。私たちが集っているこの教会も、ルーツをたどればこのエルサレム教会にたどり着くわけです。

このようにして始まった教会でしたが、まもなくして大きな試練に直面します。それまでユダヤ教を信じていた人たちが次々とキリスト教に改宗していきます。ユダヤ教の指導者たちが黙っているわけがありません。まずは脅迫してくる。それでも効き目がないと分かると、教会のリーダーだったステパノを捕まえて石打の刑で殺し、ますます迫害が激しくなる、キリスト教はエルサレムから地方に逃れなければならないという事件が起きました。つらいことではありましたが、異邦人にもキリストが伝えられ外国の地にも教会が建てられていくきっかけにもなりました。

1 聖霊によって

1) 送り出される

2、3節を読みます。「彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が『さあ、わたしのためにバルナバとサウロを聖別して、わたしが召した働きに就かせなさい』と言われた。そこで彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いてから送り出した。

「彼ら」とは、アンティオキア教会の人たちです。地図で見ると、今のシリアの国境に近いトルコ共和国にあります。この記事はいつのことかと調べると西暦45年あたりだと言われます。イエスの十字架の出来事が起きたのは西暦33年頃ですから、計算するとおよそ十数年しかたっていない。こんな短い間に、二人の宣教師を送り出すほどの力を持った教会が、海外に既にできていたことに驚きます。

2) サウロ(別名パウロ)とバルナバが選ばれる

送り出されたうちの一人サウロは、かつてパリサイ派に属するユダヤ教徒でした。パリサイ派の若きリーダーとして熱心に教会を迫害し、ステパノの殉教にも手を貸していました。そのサウロがどうして今、教会から宣教師として派遣されていくのか。ステパノが殉教して、エルサレムに大きな迫害が起こったときです。彼はそのときエルサレムでいって教会の破壊活動をしていましたが、それだけでは飽き足らず、ダマスコという町に向かいます。そこにいるキリスト教を捕まえて牢に投げ込むのが目的でした。ところがその旅の途中で彼は突然まぶしい光に照らされ、目が見えなくなる。地面に倒れると主の御声が聞こえてきた。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」サウロは尋ねます。「主よ、あなたはどなたですか。」「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」このようにしてサウロは主に出会うことになり、キリスト教になってしまう。その変化があまりにも急だったので、教会はサウロがキリスト教になったことを全く信じません。「これは何かの罠だ」と警戒して教会に入れてくれない。いっぽうパリサイ派グループからは裏切り者として暗殺命令が出ていますから行く場所がない。路頭に迷ってしまう。そんなとき手を差しのべてくれたのが、バルナバでした。この人のことは4章36節で紹介されています。「キプロス生まれのレビ人で、使徒たちにバルナバ(訳すと、慰めの子)と呼ばれていたヨセフ。」このバルナバが教会に対して「この人は大丈夫だから、どうか教会に迎え入れて下さい」ととりなしをしてくれた。二人にはこんな背景がありました。そして、キプロス島に向かうのですがそこはバルナバの故郷でもありました。バルナバにしてみれば目をつぶっても歩けるくらい詳しい。こうして見ると、聖霊はすべてがきちんと説明ができるような形で働いておられたことが分かるのです。

3) 満たされる

このアンティオキア教会から私たちが教えられることがあります。最初に聖霊の声を聞いたのは教会の中の何人かです。そこで教会全体として確認しました。あれは本当に聖霊の声であったのか。確かにそうだと分かると、次にしたのは、本当にこの二人が宣教師として適切なのか、そのことも教会が主体となって調べ、それも確認していく。そうい

うプロセスを経てやっと二人を送り出していくわけ
です。

これは今も同じです。北海道聖書学院には、毎年
一月頃になると入学希望者の申し込みが送られて
きます。それには所属教会の推薦状と、牧師や役員
の方の人物評価表も添付されています。教会全体と
して、その人は神から召しを受けているのかをその
ようにして確認します。そして、学院は入学試験と
面接をして、学院としても召しが本当であるのか、
人物として適性があるのかをもう一度確認する。そ
うして初めて学院への入学が許可されるわけです。
一つ一つ慎重に確認する作業の中に聖霊が働いて
くださっていることを、私はいつも実感するのです。

2 総督

1) 偽預言者の妨害

さて二人が向かったキプロス島には、セルギウ
ス・パウルスという地方総督がローマ帝国から派遣
されていました。二人が島にやって来たことを知り、
総督は自宅に招こうといたします。ところが魔術師
エリマが邪魔をしようとします。この魔術師の名前
は、「バルイエス」と呼ばれています。「油注がれ
者の子」、あるいは「イエスの子」という意味です。
今も時代も新興宗教の教祖の中には、「自分はイ
エスの子」であるとか、「私はイエスの生まれ変
わりである」と言う者がいます。イエスが天に上げ
られてからまだ十数年しか経っていないのに、既に
自称キリストが現れていました。

この魔術師が総督のところに入り込んでいたの
は、ひとことで言えば儲かるからだったのでしょ
う。ところがバルナバとサウロが来れば、当然自
分のやってきた嘘が暴かれる。そうしたら総督の
ところから追い出されて折角の金づるを失う。お
そらくそんな動機から、総督と二人が面会できな
いように画策いたします。

2) にらみつけるサウロ

それはどうなったか。9節。「すると、サウロ、
別名パウロは、聖霊に満たされ、彼をにらみつけ
た。」11節。「見よ、主の御手が今、おまえの上
にある。おまえは盲目になって、しばらくの間、日
の光を見ることができなくなる。」そう言い終わ
ると、魔術師の目は見えなくなった。皆さんはこ
こを読んで、サウロはすごい人だった、とか、神
の力はすばらしいと思うかもしれません。

でもサウロのことを思いだしてください。サウロ
自身もかつて教会を迫害していたとき、目が見えな

くなり、人の手を借りなければどこにも行けない
状態に置かれたことがありました。それと同じよ
うなことを今度は自分がすることになります。目
が見えなくなることがどれほど不安で辛いことか彼
は十分体験している。それなのにどうしてこんなこ
とをするのか。福音宣教の邪魔をしていた魔術師を
懲らしめるためだった、という説明は納得しやす
い。でもそれだけだろうか。もう少しこだわって
考えたい。

3) 驚嘆する

その前に、地方総督がどう反応したのかを確認
しておきます。12節。「総督はこの出来事を見て、
主の教えに驚嘆し、信仰に入った。」

注意して読んでください。総督が信仰に入ったき
っかけは何であったか。「この出来事を見て」とあ
るので、不思議な出来事を目の前に見せられて、そ
れで驚いて信じたのだろう。そう思うかもしれま
せんが、それはちょっと違う。原文の意味がわか
るように、訳し直します。「総督は、この出来事
を見た後で、サウロたちから主の教えを聞いてその
内容に驚き、信仰に入った。」

総督は、魔術師の身に起きたことは目撃してい
ます。でもそれで信じたのではない。総督は、主の
教えを聞いて驚いたのです。それで信じた。いいで
すか。総督は魔術師と長い間付き合があつたの
ですから、以前にも不思議なことは何度も見てい
たのです。変な言い方ですが免疫ができています。
サウロがこのようなことをしたからと言って、そん
なに驚きません。

3 主の教え

1) 目が見えなくなって初めて見えたもの

総督が驚いたはそこではない。主の教えに驚い
た。そこがポイントです。ではサウロが語った主の
教えとはなんであったか。ここには細かく書かれて
いません。でもヒントがあります。

サウロが魔術師の目を見えなくさせてから、こ
んなことを総督に語ったと思われます。「この魔
術師の身に起きたことは、かつて自身も経験した。」
そこからサウロがどのようにして救われたかを証し
していきます。「実は、自分もこの魔術師と同じよ
うなことをしていた。教会を迫害し、人々が福音を
聴くことができないうちに徹底的に妨害していた。
教会を憎み、次々から次へとクリスチャンを捕ま
えては牢に投げ込んでいた。ステパノが殺された時
も自分は手を貸していた。この魔術師は他人では
ない。かつての自分なのだ。」

「そんな自分が、いつ主を信じるようになったか。まさに目が見えなくなったときだった。それまでは自分は何でもできると思い込んでいた。名門と呼ばれる家に生まれ、裕福だったので、子どもの時から海外留学をし、有名な先生について特別な教育を受けてきた。おまけに人もうらやむローマの市民権も持っている。将来、パリサイ派のエリートになることを約束されていた。ないものはない。すべて持っている。目の前にはすべての可能性が広がっているように思えた。

でも目が見えなくなって初めて気がついた。ことばは変ですが、見えなくなって、初めて見えるようになった。自分は何でもできると豪語していたのに、目が見えなくなった途端に、手を引いてくれる人がいなければ何もできなくなってしまった。自分が誇ってきた地位も名誉も学歴も何の助けにもならない。いかに自分は小さくて弱くてはかない存在であったのか。そのことが見えるようになった。」

2) 主に出会う

「いったいどうしたらよいのかと絶望していたとき、主である方が声をかけてくださった。「どうしてわたしを迫害するのか。」それまで自分は「神を敬え」と人に言い、自分も守ってきたはずなのに、もしかしてその神を自分は迫害していたのか。もし神を迫害したのであれば、死罪です。非常に恐ろしいことです。でも主は私をさばこうとしなかった。その代わりにこう語ってくださった。「立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたがしなければならぬことが告げられる。」神を迫害していたこの罪人を赦してくださった。それだけではない。主は、新しい使命を私に与えてくださった。だから今私は総督の前にいるのです。」

このサウロの証しを聞きながら総督は神への信仰へと導かれました。

3) 聖霊の働きによって救われる

聖霊の働きがなければだれも神を信じることはできないと言われます。総督が主を信じる事ができたのもそうです。総督は最初、興味本位で魔術師に出入りを許していたのかもしれませんが。ところが時間が経つうちに、そこには真理がないことにだんだんと気が付き、むしろ飢え渴きを覚えます。本当の神はどこにおられるのか。総督の祈りに神は応えてくださり、アンティオキアに働きかけ、二人を送り出され、サウロがみことばを語ることで神に

出会うことになった。振り返れば、すべての人のなかに聖霊が働きかけていたのです。

では最後に、どのようにすれば聖霊が働くのか。そのことを確認しておきましょう。一つだけ条件がある。主の道を曲げているなら働きません。私はもしかして主の道を曲げているかも知れない、と不安に思ったかもしれない。不安に思った方こそ、まっすぐに歩いている。それでも不安に思う方は主の前に告げればよい。そこに聖霊が働かれます。この教会の中にも聖霊が働いておられることを、私は皆さんに知っていただきたいと願います。

主は誰を招きますか。罪のない者を招くためではなく、罪ある者を招くために私たちのところに来られました。罪を悔いる者に聖霊が豊かに働いてくださいます。そのようにしてくださる主に感謝します。